

古典教育の史的展開

—— 中学校（旧制）・高等女学校を中心に ——

松 岡 繁

（目 次）

はじめに

一 中学校（旧制）における実践

（一） 中学教則略（明治五年）

（二） 中学校教則大綱（明治一四年）

（三） 尋常中学校ノ学科及其程度（明治一九年）

（四） 中学校教授要目（明治三五年）

（五） 中学校教授要目改正（明治四四年）

（六） 中学校令施行規則中改正（大正八年）

（七） 中学校令施行規則中改正（昭和六年）

（八） 中学校教授要目中改正（昭和一二年）

（九） 中学校教科教授及修練指導要目（昭和一八年）

二 高等女学校における実践

（一） 中学校令中改正（明治二四年）

（二） 高等女学校規程（明治二八年）

（三） 高等女学校令施行規則（明治三四年）

（四） 高等女学校及実科高等女学校教授要目（明治四四年）

（五） 高等女学校令施行規則中改正（大正九年）

（六） 高等女学校及実科高等女学校教授要目（昭和一二年）

（七） 高等女学校教科教授及修練指導要目（昭和一八年）

三 実業学校における実践

（一） 徒弟学校規程（明治二七年）

（二） 実業学校令（明治三二年）

（三） 実業学校教授要目（昭和一二年）

（四） 実業学校規程（昭和一八年）

おわりに

参考文献

はじめに

国語教育の実践に当たって、その教材は現代文、古文、漢文という三つの分野に区分されることが多い。その古文、漢文は一括して古典と呼ばれるのであるが、古典の指導、すなわち古典教育はどのようにして成立し、実践されてきたのであろうか。

多くの勅令、省令、訓令等に基づき、国語科教育は進展してきたのであるが、さまざまな指導内容を踏まえながら、その中で古典教育はどのような位置を占め、役割をになってきたのであろうか。

その点で、古典教育の形態と展開の歴史を追究することは、我が国の国語科教育の歴史を追究することにもつながっているともいえるのである。

ここでは、中学校（旧制）と高等女学校とを中心にして、明治・大正・昭和（二〇年まで）の各時期における展開を概観することにする。そのことを通して、古典教育の抱えている問題点を浮き彫りにしていきたいと思う。それは、今後の古典教育推進の礎にもなると考えるからである。

中学校・高等女学校・実業学校に分類して記述しているが、中学校で既に触れている事項については、高等女学校・実業学校の箇所では重複を避けて省略している。

なお、明治三五年度の「中学校教授要目」の制定によって、古典教育の筋道はほぼ固まるのであるが、それまでの具体的な資料としては、愛媛県の資料を多く用い、史的展開の助けとした。

一 中学校（旧制）における実践

（一） 中学教則略（明治五年九月八日 文部省布達）

ア 教則の主旨

明治五年に「中学教則略」が布達された。修業年限は、下等中学は一四歳より一六歳までの三箇年、上等中学は一七歳より一九歳までの三箇年とした。上等、下等とも第一級から第六級までに区分されている。

下等中学教則では、第六級・第五級・第一級に「国語」、第四級・第三級・第二級に「国語古言」が設けられている。上等中学教則では、第六級・第五級に「国語古言」が設けられている。科目の設置状況をみると、洋学とくに自然科学の占める割合が大きく、「国語古言」等の実態もよく分かっていない。

イ 愛媛県の例

この当時に設立された学校の実態をみることにする。

「変則中学校仮規則」（明治九年八月一七日 愛媛県布達^{（1）}）

この規則の第三条には、次のように記されている。

○ 漢書英書並ニ洋算ヲ以テ各科^{少年科 成年科}ノ課業トス

（凡ソ漢書ト云フモノハ漢字ヲ以テ記スルノ書皆是ナリ故ニ翻訳書ノ類亦其中ニ在リ）

少年科は、一六年以下十四年以上の者、成年科は満十六年以上の者と定めている。

さらに、各科課業表は次のようになっている。

第二級	政治書	続々国史略	第三級	希臘史	第四級	米國史	第五級	地理書	第六級	少年科
	窮理書	続国史略		英國史略		元明史略		日本地理小誌		
	スエル馬史	続皇朝史略		希臘史		皇朝史略		十八史略		
年第二前半期		比例	年第二後半期		年第二前半期	諸算	年第一後半期		年第一前半期	第六級
					年第二前半期	分数			国史要	
					年第二前半期	四則雜題			加減	
					年第二前半期	少数			乗除	

第三級	政治書	米國史	第四級	英國史略	第五級	萬國史	第六級	地理書	第七級	第八級
	窮理書	文		希臘史		米國史		米國史		
	スエル馬史	ヒネラアナルチカル		英國史略		米國史		米國史		
年第二後半期		数学	年第二前半期		年第一後半期	数学	年第一前半期		年第三後半期	年第三前半期
					年第一後半期	数学			文章軌範	通鑑要
					年第一後半期	数学			算術雜題	開法

少年科の第一級に、「文章軌範」「作文」とわずかに国語関係の教材がみられる。
 以上の実態から分かるように、国語科という認識は薄く、洋学を中心としたもので、漢書も漢字で記したものはすべて含めるなど、漢文を古典教育の教材とする考え方も希薄であったと思われる。

チャンプル 経済書	スミス 英 国 史	数学
マルカム 日耳曼史		
第二級		
ウエルソ 経済書	ウエルソ 万 国 史	
ウエルソ 修身論		
第一級		
キゾ 文 明 史	ウエル 性 理 書	数学
第二種		
リプレゼンチーブガブウルメント		
第六級		
日本地理小志		数学
国史攬要		
第五級		
興地誌略		数学

泰西史鑑 上篇		
第四級		
泰西史鑑 中篇	登高自卑	数学
養生論	修身論	
第三級		
万国新史	立憲政体略	数学
性法略	経済小学	
第二級		
泰西国法論	泰西政学	数学
万法精理		
第一級		
国法汎論	万国公法	数学
立憲政体起立史		

「改正松山中学校規則」(明治一一年六月二七日 布達⁽²⁾)

(変則中学校の系列の学校)

この規則によれば、甲科(およそ五年)、乙科(およそ三年)を設けている。甲・乙両科の科目を「教則」では、次の五科としている。

甲科 第一英書科 第二漢書科 第三数学科 第四文書科 第五口授科

乙科 第一漢書科 第二数学科 第三文書科 第四習字科 第五口授科

甲・乙科を比べてみると、乙科には英書科がなく、習字科が設けられている。

「教則」には、次のような規定がみえる。

○凡ソ漢書ト云モノハ漢字ヲ以テ記スル書皆是ナリ故ニ翻訳書図書等亦其中ニアリ

○口授トハ教師諸書ヲ参考シテ修身開智ノ事ヲ談話スルモノナリ

○教授ノ法ハ講義会読輪講暗記等宜キヲ計テ教師適宜ニ授クルモノトス

これらの規定から、漢書科の一部と文書科が、国語科の内容に相当するものと考えられる。

「科業表」の中から、漢書科と文書科のものをまとめると次のようになっている。

これをみても分かるように、授業内容は、漢文を中心とした漢文教育であったのである。漢文そのものが、古典教材であったといえる。

それは、読解だけの分野に限らず、作文の分野においても、漢文教育がなされていたのである。

正岡子規に、「文稿三」(明治一四年)⁽³⁾がある。その中には、「紀事一則松山中学校兼題○口授接統」のほか、「謝母贈葛衣書」をはじめとして、合計七編の松山中学の課題作文がみられる。それらはすべて、漢文体で書かれており、当時の作文の実態をうかがい知ることができる。

甲科業表

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	級
後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	期
5		4		3		2		1		学年
八大家読本	八大家読本	文章軌範	史記	春秋左氏伝	近世日本外史 日本政記	日本外史	十八史略 続十八史略	皇朝史略続編 続国史略	国史概要 皇朝史略正編	漢書科
漢文諸体	和文漢訳	和文漢訳	復文	復文	漢文和訳	漢文和訳	通俗書牘	通俗書牘	綴語	文書科

乙科業表

一	二	三	四	五	六	級
後	前	後	前	後	前	期
3		2		1		学年
十八史略 続十八史略 政体書	続国史略 泰西国法論 博物学	皇朝史略正統 修身論 經濟小学	登高自卑後編 泰西史鑑 万国新史下編	輿地誌略 登高自卑前編 初学人身窮理	地理小誌 国文學要 勸善訓蒙	漢書科
書牘 論說文	書牘 論說文	記事 書牘	記事 書牘		填字 綴語	文書科

(二) 中学校教則大綱 (明治一四年七月二九日 文部省布達)

ア 大綱の主旨

この大綱では、中学校は初等中学科(四箇年)、高等中学科(二箇年)に分かれ、国語科に関するものとして、「和漢文」、「習字」が設けられることとなった。そして、「和漢文」は、通常「読書」と「作文」の二分野を有することになるのである。毎週授業時間数は、初等第一学年七、第二、四年六、高等第一、二年七と例示された。

イ 愛媛県の例

大綱に基づいて、各県ではそれぞれ規則を定めることとなったのである。愛媛県の例を挙げてみると、次のとおりである。

「愛媛県中学校教則」(明治一五年一月一三日 布達⁽⁴⁾)

教授要旨

○和漢文ハ殊ニ必要ノ学科ニシテ最モ精密ニ教授スヘキモノタリ、コレヲ分テ読書作文ノ二トス、
読書ハ講読ノ力ヲ養ヒ作文ノ用ニ資スルノ学科タレハ、其コレヲ授クルニハ初等中学科ニ在テハ和漢文ヲ
併セ授ケ誦読講義ノ法ヲ用ヒ、音訓句読ヨリ字義句意章意ヲ解セシムルヲ主旨トシ、高等中学科ニ至リテ
ハ漢文ヲ授ケ文章ノ段落賓主ヨリ抑揚頓挫照応波瀾之諸法ヲ説キ明カシ文理ニ通曉セシメンコトヲ要ス、
作文ハ思想ヲ表シ実事ヲ記スルノ具ニシテ尤モ必要ノ学科タリ、初等中学科ニ於テハ書牘文仮名交リ文及
漢文ヲ授ケ、書牘文仮名交リ文ハ近世ノ文体ニ倣ヒ雅馴ナルヲ主トシ、漢文ハ古雅ノ体ニ倣ヒ文格ニ適フ
ヲ要シ先記事文ヲ作ラシメ、高等中学科ニ至リテハ漢文ヲ授ケ記事文ヨリ志伝論説文ニ及ホシ且和文又ハ
詩歌ヲ作ラシムヘシ、凡ソ文章ハ文義簡明ニシテ言詞条暢ニ行文ノ敏捷ナルヲ主トシ、且詩歌ハ韻調正雅
ニシテ趣向ノ優美ナランヲ要ス、(傍線は引用者。)

書名	巻冊記号	出版年月	訳著者氏名
和漢文科ノ部(初等中学科)			
日本外史	一ヨリ十二迄十二冊	明治十一年三月改版	頼久太郎 著
日本文典	上下二冊	明治九年三月	中根 淑 著
日本政記	一ヨリ七迄七冊	明治九年六月改版	頼久太郎 著
詞ノ八衢	上下二冊	明治十三年改版	本居 春庭 著
正文章軌範	三冊	寛政三年三月	宋謝校得 著
通鑑攬要	一ヨリ十五迄十五冊	明治九年十月	清妖鑑 著
謝選拾遺	一ヨリ五迄五冊		頼張景星 著
史記評林			漢司馬選 著

また、教科書としては、次のものを使用することとなっていた。

文漢和		科 学	
七	作 読	数時週毎	初 等 中 学 科
交 仮 文 漢 近 文 日 読 リ 仮 文 書 漢 近 文 日 書 文 名 牘 文 易 法 本		前 第 期 八 上 級	第一 年
七		後 第 期 七 上 級	
六		前 第 期 六 上 級	
六		後 第 期 五 上 級	
六		前 第 期 四 上 級	
六		後 第 期 三 上 級	
六		前 第 期 二 上 級	第二 年
六		後 第 期 一 上 級	
六		前 第 期 四 上 級	
六		後 第 期 三 上 級	
六		前 第 期 二 上 級	
六		後 第 期 一 上 級	
六		前 第 期 四 上 級	第三 年
六		後 第 期 三 上 級	
六		前 第 期 二 上 級	
六		後 第 期 一 上 級	
六		前 第 期 四 上 級	
六		後 第 期 三 上 級	
六		前 第 期 二 上 級	第四 年
六		後 第 期 一 上 級	
六		前 第 期 四 上 級	
六		後 第 期 三 上 級	
六		前 第 期 二 上 級	
六		後 第 期 一 上 級	
六		前 第 期 四 上 級	第一 年
六		後 第 期 三 上 級	
六		前 第 期 二 上 級	
六		後 第 期 一 上 級	
六		前 第 期 四 上 級	
六		後 第 期 三 上 級	
六		前 第 期 二 上 級	第二 年
六		後 第 期 一 上 級	
六		前 第 期 四 上 級	
六		後 第 期 三 上 級	
六		前 第 期 二 上 級	
六		後 第 期 一 上 級	

「各等中学校毎級数教科課程及教授時数」は次のようになっている。

和漢文科ノ部 (高等中学科)			
東萊博議	一ヨリ四迄四冊	文化八年	宋呂祖義撰
唐宋八大家文	一ヨリ八迄八冊		明黃之宋校
春秋左氏伝校本	一ヨリ十五迄十五冊		清沈潜德評点 石村貞一纂評 奏鼎校

以上の資料から分かるように、「和漢文」科は、「読書」・「作文」の二分野を有しているが、いずれの分野においても、漢文を極めて重視していたことである。和文系統は、第二学年までで、それ以後は姿をみせていない。上学年になるに従って、読書・作文ともに漢文が重んじられたのである。

(三) 尋常中学校ノ学科及其程度 (明治一九年六月二二日 文部省令)

ア 省令の主旨

この省令は、「中学校令」(明治一九年四月一〇日勅令)に基づいて発せられたもので、中学校は高等中学校と尋常中学校とに分けられ、尋常中学校は五箇年を修業年限とした。

学科としては、初めて「国語及漢文」が現れた。この名称は、昭和六年一月「中学校施行規則」の改正で「国語漢文」となるまで、四十余年の間継続することになるのである。

また、「程度」としては次のように定められた。

○ 漢文交り文及漢文ノ講読書取作文

漢文に対する和文は、「漢字交り文」として一括されているのである。

授業時数は「五 五 三 一」と定められたが、今までのそれに相当する科目に比べて減少しているのが分かる。

イ 愛媛県の例

この当時の状況を次の例にみたいと思う。

「愛媛県伊予尋常中学校規則」(明治二十一年八月三十一日 告示⁽⁵⁾)

「教旨」、「教程」は次のようになっている。

国語及漢文科

第一項 教旨

漢文交り文及漢文ノ講読書取作文ヲ授ケ時々文章ヲ読誦セシメ以テ正シク国語ヲ綴リ正シク国語ヲ話シ正シク漢文ヲ解シ正シク漢文ヲ綴ルヲ旨トス

第二項 教程

初メハ専ラ漢字交り文ニ付キ広ク文意ヲ解セシメ次ニ漢文ヲ交ヘ漸ク進ンテ専ラ名家ノ漢文ヲ授ケ以テ其講読ヲ自在ナラシム且傍ラ書取作文ヲ課シ作文ハ初メハ漢字交り文ヲ綴ラシムモ漸次漢字ノ作文ニ及フヘシ(傍線は引用者。)

また、毎週授業時数は、次のようになっている。

学 科	時 数	第 一 年 級	第 二 年 級	第 三 年 級	第 四 年 級	第 五 年 級
国 語 漢 文 科	六	一 国語 一 書取 四 作文 講読	一 同上 一 同上 三 同上	一 同上 一 同上 三 同上	一 同上 一 同上 二 同上	一 同上 二 同上

「国語」が「漢字交り文」に相当するものと思われる。

ウ 省令の改正

なお、明治二七年三月一日には、文部省令によつて、「尋常中学校ノ学科及其程度」が改正された。

学科の程度としては、「漢字交り文及び漢文ノ講読」となり、漢文の「書取作文」が削られることになった。これは、国語科における漢文学習の目的は、読解や理解にあるのであつて、作文や表現までは要求しないということの表れであつた。これは、国語重視の動きといつてもよく、時代の流れも漢学中心から、日本古典へと移つていく過程にあつたと考えられる。

また、毎週授業時数は「七 七 七 七」と増加された。これは、国語教育は愛国心を養成するため必要であると考えたための処置であつた。これは、当時の文相井上毅の見識の表れたものであるといわれているが、「省令説明」⁽⁶⁾では、次のように述べている。

「国語漢文ノ時間ヲ増シタルハ改正ノ一要点トス国語教育ハ愛国心ヲ成育スルノ資料タリ又個人トシテ其ノ思想ノ交通ヲ自在ニシ日常生活ノ便ヲ給足スル為ノ要件タリ今ノ青年ニシテ中等又ハ高等教育ヲ受ケタル者卒業ノ後或ハ此ノ点ニ於テ不足ヲ感スル者多シ是レ授業時間ヲ増加スルノ已ムヲ得サル所以ナリ

国語ト漢文トハ相待テ其ノ用ヲ見ル蓋国語ハ主ニシテ漢文ハ客ナリト雖中古以来国語ノ材料ハ多ク之ヲ漢文ニ取レリ故ニ両者ノ間尤教授ノ上ニ適當ノ調和ヲ得ルヲ要ス」(傍線は引用者。)

国語と漢文の關係を、「国語ハ主ニシテ漢文ハ客ナリ」と述べ、国語を重視する姿勢を如実に示すとともに、両者の調和を求めている。

エ 愛媛県の例

この改正をうけて、愛媛県では次のように定めている。

「愛媛県尋常中学校規則」(明治二八年四月九日 愛媛県令⁽⁷⁾)

「教授ノ要旨及其程度」

国語及漢文

国語漢文ヲ自由ニ理解シ且国語ヲ自由ニ正シク使用スル能力ヲ養ヒ以テ処世上ニ益シ兼テ徳性ヲ涵養スルヲ以テ要旨トス 国語ニ於テハ講読文法及作文ヲ授ケ講読ニハ今代ヨリ始メテ中世ニ至ルマテノ文章ヲ講読セシメ作文ニハ日用書類及漢字交リ文ヲ作ラシメ又傍ラ書取ヲナサシム 漢文ニ於テハ内外ノ作ニ係ル文章ヲ講読セシメ傍ラ文法ノ要略ヲ授ク(傍線は引用者。)

「講読ニハ今代ヨリ始メテ中世ニ至ルマテノ文章ヲ講読セシメ」とあるように、国語の教材(古典教材)の範囲を柔軟に取り扱いはじめた様子をうかがい知ることができる。

また、「学科課程及毎週授業時間数表」は、次のようになっている。

学 科				
第 五 級				時数
二	国語講読	一	国語文法	
一	国語文法	一	作文書取	七
三	漢文講読	三	同上	
第 四 級				時数
二	同上	一	同上	
一	同上	一	同上	七
三	同上	三	同上	
第 三 級				時数
二	同上	一	同上	
一	同上	一	作文	七
三	同上	三	同上	
第 二 級				時数
二	同上	一	同上	
一	同上	一	同上	七
四	同上	四	同上	
第 一 級				時数
二	同上	一	同上	
一	同上	一	同上	七
四	同上	四	同上	

時数表の各級の時数が、明治一九年の省令と比べてみると、その増加がはっきりとしている。「国語講読」、「国語文法」、「作文書取」、「漢文講読」と課程が明確に区別されているところに特色がみられる。

オ 教科書について

なお、この時期の教科書として、画期的なものであったといわれるものに、『国文学』（上田万年編、明治二三年五月一六日発行 雙二館⁽⁸⁾）がある。卷之一の「緒言」で編者は次のように述べている。

「著者は国文学が一般中等教育上の一学科となりかの国語科と両立して少くとも漢文学と同地位を占めんとを冀望して止まざるなり最後に著者は文学を教授する教師に対し徒に字義難句を説明するのみならず又よく学生に作者の経歴せる所文章歌句の主旨のある所と指摘し併せて辞書の用法古事引証の索め方等をも教ふべしと希望するものなり故に著者は源氏物語を源氏物語としてのみ熟知し居る学生を養成するを願はずして一度源氏物語を読めば容易に中古文学の一斑を理解し且中古社会の状況をも観察し得べき人を得んことを希望して止まざるなり」（傍線は引用者。）

明治一〇年代は全般的にみて、漢文学が上位にあつて優先されていたが、二〇年代に入り国文学の重視がいはれるようになった。編者も、国文学が漢文学と肩を並べるべきであると主張しているのである。

この傾向は、明治二七年の「尋常中学校ノ学科及基程度」の改正にすでにみられることであり、すでに述べたとおりである。

明治二〇年代の教材使用の例を、愛媛県の布達にみると次のようになっている。

「中学校教科仮定ノ件」（明治二二年二月一三日 県布達⁽⁹⁾）

「国語及漢文」

高等日本読本、かなづかひ教科用書、和文読本、日本外史、日本政記、近世名家文鈔、文章規範、史記伝鈔

ここでも、漢文に対して和文系統のものが従来より増加傾向にあることが分かる。

(四) 中学校教授要目 (明治三五年二月一日 文部省訓令)

ア 要旨の主旨

この要目は、「中学校令改正 (明治三二年二月七日勅令) 及び「中学校令施行規則」 (明治三四年三月五日文部省令) に基づいて、決定されたものである。「中学校令」により、中学校の修業年限は、原則として五箇年となった。

「施行規則」の「学科及其ノ程度」の第三条には、国語科の目的・内容が明確に記されている。

国語及漢文ハ普通ノ言語文章ヲ了解シ正確且自由ニ思想ヲ表彰スルノ能ヲ得シメ文学上ノ趣味ヲ養ヒ兼テ智徳ノ啓発ニ資スルヲ以テ要旨トス

国語及漢文ハ現時ノ国文ヲ主トシテ講読セシメ進ミテハ近古ノ国文ニ及ホシ又実用簡易ナル文ヲ作ラシメ文法ノ大要、国文学史ノ一斑ヲ授ケ又平易ナル漢文ヲ講読セシメ且習字ヲ授クヘシ (傍線は引用者。)

ここには、国語科の基本的性格がうかがえるが、まとめれば次のようになる。

○ 現時の国文を主要教材とすること。

○ 古典教材の範囲を近古の国文までとしたこと。

○ 国文学史の一斑を授けること。

○ 漢文は平易なものとする事。

「要目」では、「国語及漢文」の内容を、「講読」、「文法及作文」、「習字」に分け、講読については、各学年毎にその仕方並びに材料について具体的に述べている。また、文法、作文、習字についても、指導事項を中心

に詳しく規定されている。

イ 講読の内容

なかでも、「講読」（読方・解釈・暗誦）における「講読ノ材料」は極めて詳細で、国語科教育の史的展開をみるうえで重要な規定である。

第一学年

国語ハ小学校ニ於ケル国語トノ連絡ヲ図リ今文ヲ用ヒテ修身、歴史、地理、理科、実業等ニ関スル事項ヲ記シタル現代作家ノ平生ナル記事文、叙事文等ヲ採ルヘシ又普通今文ノ外正確ナル口語ノ標準ヲ示スヘキ演説、談話ノ筆記並ニ現代名家ノ書牘文及新体詩ヲモ含マシメテ可ナリ其ノ程度ハ文部省編纂高等小学校用読本ノ第六卷及第七卷ニ準スヘシ

漢文ハ初ヨリ文意完結セル全篇ヲ採ルコトヲ要セス第一学期ニ於テハ単語単句ヲ挙ケテ其ノ組織ト国語ノ組織トノ異同ヲ示シ第二学期以後ニ於テハ我国近世作家ノ用語平易ニ構造簡易ナル短章ニ句読、返り点、送り仮名ヲ施シタルモノヲ授ケ時々既ニ課シ了リタル国語ノ一二節ヲ漢訳シタルモノヲモ交ヘテ之ヲ対照セシムヘシ

国語漢文ヲ課スル比ハ国語ハ、漢文ニタルヘシ

第二学年

国語

今 文 前学年ニ準シ又現代作家ノ論説文ヲ加フ

近世文 今文ニ最モ近キモノ、例ヘハ橘南谿ノ東西遊記、伴蒿蹊ノ近世畸人伝、貝原益軒ノ訓誡書類、成

島司直ノ徳川実記附録ノ類

漢文

前学年ニ準シ又我国近世作家ノ簡易ナル叙事文或ハ伝記、紀行等ノ文意完結セル短篇ヲ加フ、例ヘハ頼山陽ノ日本外史、大槻磐溪ノ近古史談、塩谷宕陰ノ宕陰存稿、安井息軒ノ讀書余適ノ類

第三学年

国語

国語漢文ヲ課スル比ハ国語七、漢文三ニシテ国語ハ今文二、近世文一ノ比ヲ以テ之ヲ課スヘシ

今文 現代ノ思想及事實ヲ叙述論議スル今文

近世文 室鳩巢ノ駿台雜話、安藤年山ノ年山紀聞、新井白石ノ読史余論、本居宣長ノ玉勝間ノ類

近古文 鎌倉室町時代ノ文、例ヘハ保元平治物語、神皇正統記、十訓抄、樵談治要ノ類

韻文 主トシテ今様歌

漢文

前学年ニ準シ又我国作家ノ論説文ヲ加フ、例ヘハ頼山陽ノ日本外史ノ叙論ノ類

国語漢文ヲ課スル比ハ国語七、漢文三ニシテ国語ハ今文三、近世文二、近古文一ノ比、漢文ハ記事文叙事文一、論説文一ノ比ヲ以テ之ヲ課スヘシ

第四学年

国語

今文 前学年ニ準シ又詔勅、上書等ヲ加フ

近世文 新井白石ノ折焚柴ノ記、太宰春台ノ經濟録ノ類、但稗史ノ類ト雖モ教育上ノ目的ニモトラサル限ハ之ヲ採ルヲ可トス

近古文 源平盛衰記、太平記ノ類

歌 古今和歌集ノ類

漢文 句読及返り点ヲ施シ送り仮名ヲ省キタルモノ

散文 前学年ニ準シ又支那作家ノ簡易ナル伝記、紀行等ノ文ヲ加フ例ヘハ清初作家、唐宋八家ノ文、佐藤一斎、松崎慊堂ノ文ノ類

詩 唐詩選ノ類

国語漢文ヲ課スル比ハ国語六、漢文四ニシテ国語ハ今文二、近世文一、近古文一ノ比、漢文ハ我国作家ノ文一、支那作家ノ文一ノ比ヲ以テ之ヲ課シ詩歌ハ適宜之ヲ加ヘ授クヘシ

第五学年

今文、近世文、近古文、歌 前学年ニ準ス

漢文

散文 前学年ニ準シ又史記、蒙求、論語ノ類ヲ加フ

詩 前学年ニ準ス

国語及漢文ヲ課スル比ハ国語六、漢文四ニシテ国語ハ今文一、近世文一、近古文一ノ比、漢文ハ我国作家ノ文一、支那作家ノ文三ノ比ヲ以テ之ヲ課シ詩歌ハ適宜之ヲ加ヘ授クヘシ

国文学史 毎週三時

主要ナル文学時代 顯著ナル文学者 顯著ナル著作物 各種ノ文体 歌体

国文学史ヲ授クルニハ我国ノ漢学ヲモ度外ニ置クヘカラス又上古文学ノ一斑ヲモ窺ハシムヘシ（傍線は引用者。）

ここには、国語教科書に採録されるべき教材の分量比や具体的な教材名を挙げている。古典教材の範囲は、今文、近世文、近古文までとなっており、まだ中古文や上古文は対象外となっていたのである。

毎週授業時数は、「七 七 七 六 六」と規定されているが、講読に充てる時数は「五 五 五 五」となっている。そのうち、第五学年の「五」については、第三学期は「講読」二時間、「国文学」三時間となっている。

(五) 中学校教授要目改正（明治四四年七月三十一日 文部省訓令）

ア 要目の要旨

この要目は、「中学校令施行規則中改正」（明治四四年七月三十一日文部省令）に基づいて発せられたものである。「国語及漢文」は「八 七 七 六 六」の毎週授業時数となり、「国語講読」（読方及解釈・話方・暗誦・書取）、「漢文講読」、「作文」、「文法」、「習字」の五分科で構成されることになった。このうち、「国語講読」については、次のように規定された。

国語講読ノ教材ハ普通文ヲ主トシ口語文・書牘文・韻文ヲ交フ

普通文ハ現代文ヲ主トシ近世文・近古文ヲ交フ何レモ平易ニシテ作文ノ模範トスヘキモノタルヘシ

口語文ハ簡明ニシテ方言ヲ雜フルコトナク口語ノ標準ヲ示スニ足り話方・作文ノ模範トスヘキモノタルヘシ

書牘文ハ平易ニシテ繁縷ニ失セス日用書牘文ノ模範トスヘキモノタルヘシ

韻文ハ新体詩・短歌・今様・俳句等ニ互リテ格調高雅ナルモノタルヘシ

右諸種ノ文章ハ我国体及民族ノ美風ヲ記シ国民性ヲ發揮スルニ足ルモノ、健全ナル思想ヲ述ヘ道義的觀念

ヲ涵養スルニ足ルモノ、忠良賢哲ノ事蹟ヲ叙シ修養ニ資スヘキモノ、文学的趣味ニ富ミ心情ヲ高雅ナラシムルニ足ルモノ、又ハ日常ノ生活ニ裨益シ常識ヲ養成スルニ足ルモノ等タルヘシ（傍線は引用者。）
 ここから分かるように、古典教材の文章選択の基準が明示され、中等教育における古典教材は一定のまとまりをみせることになったのである。

また、単に近世文、近古文といった時代区分による文章だけでなく、「我国体及民族ノ美風ヲ記シ国民性ヲ發揮スルモノ」さらには「文学的趣味ニ富ミ心情ヲ高雅ナラシムルニ足ルモノ」とあるように、人間の精神的な面に寄与できる材料を求めていたのである。

なお、明治三五年の「中学校教授要目」にあった「国文学史ノ一斑ヲ授ケ」は、削除されることとなった。文学史の授業は、国語講読の中で随時実施されることとなったのである。

イ 指導法の研究

このように、国語科の目的、構成、教材などの組織化がなされ、筋道が明確になっていくなかで、教授法の研究も徐々になされつつあった。

明治四三年刊行の『中等教育教授』上巻（明治四三年五月七日 中等教科研究会編 育成会刊¹⁰）の中で、高等女学校の教員であった市川源三は、次のように述べている。

「中等教育には教授法は更に不要だと云ふ意見を有して居る人がある。成程小学校教授法の如き教授法は不要かも知らぬが、既に教授をして居る以上は、其の方法に巧拙があり、又巧拙がある以上は、夫れをもつと巧に仕やうと思へば其所に方法の無くてならぬことは言ふまでも無からう。」

本稿は、総論、初級教授法、上級教授法の三つから構成されている。初級教授法では、現代の国語を中心に講読、文法、作文等についてその教授法を述べ、上級教授法では、国民文学を中心に講読、作文、文法、修辭

法、詩歌等の教授法を論述している。

ともあれ、中学校における国語科の教育課程は明治時代をもつて一応整備され、古典教育も種々の制約があるもののその筋道が明確にされたのである。

(六) 中学校令施行規則中改正 (大正八年三月二十九日 文部省令)

この改正は、「中学校令中改正」(大正八年二月七日勅令)に基づいて発せられたものである。

この改正で注目すべきことは、次の規定である。

中学校ニ於テハ中学校令第一条ノ旨趣ニ依リ生徒ヲ教育シ殊ニ国民道德ノ養成ニ関連セル事項ハ何レノ学
科目ニ於テモ常ニ留意シテ教授センコトヲ要ス(傍線は引用者。)

「国民道德ノ養成」に眼目が置かれているが、古典教育の教材等においても、その方向付けがなされたのである。

教科書の教材も、古文中心の傾向から抜け出して、近代文学の比重が増加する傾向にあった。一方では、近代文学の作品においても、教材としての古典として固定化する傾向にあった。

この時期、旧制高校への入学難から各学校は、授業時数の増加や副教材の活用などを図り、それに対応したのであった。その一例を次に挙げることにする。

なお、「施行規則」では、毎週授業時数は、「八 八 六 五 五」とし、科目によっては四・五年において二時間までの増加を認めていた。

又11

—
—
—
—

ア 規則の主旨

性ヲ涵養シ文学上ノ趣味ヲ養ヒ知徳ノ啓発ニ資スルヲ以テ要旨トス
 国語漢文ハ普通ノ言語、文章ヲ了解シ正確且自由ニ思想ヲ發表シ文字ヲ端正ニ書写スルノ能ヲ得シメ國民

国語漢文ハ現時ノ国文ヲ主トシテ講読セシメ進ミテハ平易ナル近古文ヨリ簡易ナル上古文ニ及ボシ又平易ナル漢文ヲ講読セシメ簡易ニシテ實用ニ適スル国文ヲ作ラシメ国語文法ノ大要及習字ヲ授クベシ（傍線は引用者。）

ここでは、「生徒教養ノ要旨」の中での「道德及国民教育ヲ施シ」をうけて、「国民性ヲ涵養シ」「知徳ノ啓発」が強調されたのである。

古典教材の範囲も、「簡易ナル上古文ニ及ボシ」とあるように上古文まで対象となり、今までのような制約はなくなり、広い範囲から選ぶことができるようになった。

イ 教科書について

教科書『国語』（昭和九年 岩波書店編集部編 岩波書店 卷一―卷一〇⁽¹²⁾）によれば、古典教材として採録されている、主なものは次のようになっている。

第一学年 かにん（柳沢淇園）、親心（柳沢淇園）、藤樹先生（橘南谿）、蜃気楼（橘南谿）など

第二学年 天徳寺了伯（湯浅常山）、伊達政宗（新井白石）、霧島山（橘南谿）、青木新兵衛（室鳩巢）、板倉父子（新井白石）、誠（三浦梅園）、惜陰（貝原益軒）、創始者の苦心（杉田玄白）、西郷の一言（勝海舟）、天（西郷隆盛）など

第三学年 道を知れる者（吉田兼好）、熊野落（太平記）、正行の参内（太平記）、熊王の発心（吉野拾遺）、国上山（良寛ほか）、故郷の花（平家物語）、小枝の笛（平家物語）、扇の的（平家物語）芸能逸話（古今著聞集）、雑煮（与謝蕪村）、不動智（沢庵）、鎮西八郎為朝（保元物語）、狐塚（続狂言記）など

第四学年 水の音（西行、源実朝）、源氏物語論（本居宣長）、平重盛（平家物語）、福原落（平家物語）、ゆく川の流（鴨長明）、法師の話（吉田兼好）、学問（松平定信）、月の兔（良寛）、奥の細道（松尾芭蕉）、陽炎（松尾芭蕉）、人臣の道（北畠親房）、舞へ舞へ蝸牛（梁塵秘抄）など

第五学年 倭建命（古事記）、万葉集抄、かぐや姫（竹取物語）、都鳥（伊勢物語）、宇多の松原（紀貫之）、古今集抄、須磨の秋（紫式部）、春は曙（清少納言）、道長の幼時（大鏡）、法成寺の造営（栄華物語）

語)、源信僧都の母(今昔物語)、新古今和歌集、大原御幸(平家物語)、新島守(増鏡)、日野の閑居(鴨長明)、只今の一念(吉田兼好)、馬追三吉(近松門左衛門)、大晦日(井原西鶴)、幻住庵の記(松尾芭蕉)、俳文二篇(横井也有)、みとり日記(小林一茶)、物学び(本居宣長)、月の前(上田秋成)、芳流閣(滝沢馬琴)など

この教科書は、全国的に採用した学校が多かったといわれているが、この時期における教材採択の状況をうかがうことができる。第五学年は古典教材が多く、上古文・中古文を集中的に取り扱っていることが分かる。なお、毎週授業時数については、基本科目が「七 六 六 四 四」の場合は四・五学年に、基本科目が「七 六 四 四 四」の場合は、三・四・五学年に一・二の増加科目を設けられることとなった。「国語漢文」は両科に入れられていた。

(ハ) 中学校教授要目改正(昭和二二年三月二七日 文部省訓令)

この改正により、「国語漢文」の目的は次のように規定された。

国語漢文ニ於テハ国語ノ理會及応用ノ能ヲ得シメ漢文ノ讀方及解釈ノ力ヲ養ヒ特ニ我が国民性ノ特質ト国民文化ノ由来トヲ明ニスルコトニ注意シ国民精神ノ涵養ニ資スルコトヲ要ス(傍線は引用者。)

「国民性」、「国民文化」、「国民精神」が重んじられ、古典教育も規制を受けることとなるのである。

「中等学校改正教授要目の趣旨」(昭和二二年五月 文部省解説)の中で、改正の方針を次のように説明している。

- 一 祖先の精神的遺産たる国語漢文の資料に拠つて、我が国体の本義を一層明に会得させること。
- 二 我国民精神に立脚して、現下の世界に於ける我が国の地位を自覚させ、大国民としての自己完成に向つて志を立てしめること。

三 国語愛護の熱意を喚起し、日常の言語及作文に於て明晰にして品位ある国語の使用を修練させること。

四 国語漢文科に於て最も大切な形式内容不離一体の要旨を一層徹底せしめること。

五 儒教の我が国民精神に及した効果、漢文の我が国語に与へた影響について公正な認識を持し、国語漢文が一科として我が国民の教養に提携する所以を徹底させること。

教育全体が、大きく国家主義の方向に流されていく姿をかいま見ることができ。教科書（教材）もこの規定に従って改正されていくのである。

(九) 中学校教科教授及修練指導要目（昭和一八年三月二五日 文部省訓令）

ア 要目の主旨

この要目は、「中等学校令」（昭和一八年一月二一日勅令）及び「中学校規程」（昭和一八年三月二一日文部省令）に基づいて発せられたものである。

今回の改訂の要点は、次のようになっている。

- 従前の「国語漢文」は「国民科国語」として、修身、歴史及地理の三科とともに国民科の中に統合される。
- 「国民科国語」は、講読・文法・作文・話方の四分科となる。
- 「国語の醇正化」並びに「古典」の読解力の錬成という二つが眼目となる。
- 国語の教科書は、今までの検定制から中学校としては初めての国定制になる。
- 毎週の授業時数は、「五 五 五（四年生で修了）」となる。
- 「習字」は、芸能科書道となる。
- 「国民科国語」の「教授方針」には、次のように示されている。

一 国語が国民的思考感動ノ具現ニシテ且之ヲ形成スルモノナル所以ヲ明ニシ国語ノ正確ナル理念・発表ノ能力ヲ養ヒ国語尊重ノ精神ヲ涵養スベシ

一 古典トシテノ国文ヲ通ジテ皇国ノ伝統ト其ノ表現トヲ会得セシメ国民生活ノ発展ト皇国文化ノ創造トニ培フベシ

一 古典トシテノ漢文ヲ通ジテ皇国及東亜ノ思想、文化ト其ノ表現トヲ会得セシメ国民精神ノ涵養ニ資スベシ
(傍線は引用者。)

戦時下にあつて、「皇国ノ伝統」、「皇国ノ文化ノ創造」という思想が、国語科教育(古典教育)をおおつていたのである。

イ 教科書について

「中等学校令」によつて、教科書が国定制となつたので、昭和一八年『中等国文』(文部省編 文部省 卷一―卷五)⁽¹³⁾を發刊した。昭和一九年から使用されたものである。

この教科書に採録されている古典教材は、次のようになっている。

卷一 (一二課で構成されている。)

富士の高嶺(万葉集に拠る)、戦国の武士(常山紀談)、武士氣質(藩翰譜)、親心(雲萍雜志)、朝のころ(橘曙覧) など

卷二 (一一課)

わたつみ(万葉集)、一門の花(平家物語)、すすきの穂(良寛、大隈言道他)、大君のへに(太平記)、土風(駿台雜話)、創始者の苦心(蘭学事始) など

卷三 (一二課)

宇智の大野（万葉集）、草薙の大刀（古事記）、源家のほまれ（平家物語）、浮島が原（義経記）、磯もとどろに（源実朝）、大塔宮（太平記）、文武の道（神皇正統記）など

卷四（一一課）

軻の音（万葉集）、大国主神（古事記）、人臣の道（神皇正統記）、菊池一族（太平記）、月天心（蕪村）、高名の木のぼり（徒然草）など

卷五（一七課）

若葉（万葉集）、やまとうた（紀貫之）、春は曙（枕草子）、御賜の御衣（大鏡）、光頼御参内（平治物語）、月の前（上田秋成）、天の香具山（新古今和歌集）、敷島の道（増鏡）、説話三則（古今著聞集、十訓抄、宇治拾遺物語）、先達（徒然草）、奥の細道（松尾芭蕉）など

臨戦態勢のもと、勤労奉仕等で生徒は工場に駆り出されるなど、戦時下のあわただしさの中で古典教育の実践を定着していくことは難しい状態であった。

それにしても、先に引用した『国語』（昭和九年 岩波書店）と教材を比較してみると、その採録方針の違いを如実に示している。

二 高等女学校における実践

（一）中学校令中改正（明治三十四年十二月一日 勅令）

ア 改正の主旨

この法令の第一四条は、次のとおりである。

○高等女学校ハ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ施ス所ニシテ尋常中学校ノ種類トス
ここに初めて、「高等女学校」の名称が出現し、女子中等教育の規定がなされたのである。高等女学校を尋常中学校の種類とし、法規上、男子の中学校に対応する女子の教育機関であると規定したことになる。
この当時の状況の一端を次の資料にみることにする。

イ 愛媛県の例

「私立愛媛県高等女学校設置願」(明治二四年一〇月二日)⁽¹⁴⁾には、授業要旨の中に「読書科」を設け、次のように記している。

先ツ読法ヲ正シクシ字音字義ヨリ熟字章句ノ義ヲ明カニシ一般普通ノ書ヲ解説スルニ差支ナカラシメ其作文ハ語法文法ノ初歩ヲ授ケ實際適切ナル記事消息文ヲ練習セシム

この設置願に基づいて設置された高等女学校の規則は、次のようなものであった。

「私立愛媛県高等女学校規則」(明治二四年一〇月五日開校)⁽¹⁵⁾本校の修業年限は、本科は三箇年、予科は四箇年となっている。なお、教科用図書としては、本科では、日本外史、十八史略、普通国文等が、予科では、高等日本読本等が使用された。授業の課程表は、次のようになっている。

愛媛県高等女学校課程表			
読書	学期		学科
	第一年	第二年	予
(文)叙事文 日用文	(読)漢字交リ 文和文	同上	同上
同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上
六	毎週時間	同上	同上
読書	学期		学科
	第一年	第二年	本
(文)叙事文 日用文	(読)漢字交リ 文和文	(文)同上	(読)同上
(文)同上	(読)同上	(文)同上	(読)同上
(文)前期ノ続 キ及国歌	(読)同上	(文)同上	(読)同上
六	毎週時間	同上	同上

課程表中の(読)は講読を、(文)は作文を意味しているものと思われる。

(二) 高等女学校規程(明治二八年一月二九日 文部省令)

ア 規程の主旨

この規程により、学科目、修業年限、入学資格等が明確にされた。修業年限は六箇年で四箇年の尋常小学校の卒業生とした。

国語に関する科目には、「国語」と「習字」とがあり、随意科目として「漢文」がある。「国語」は、「講読」と「作文」に分かれ、読方、話方、作文、文法等の領域が指導内容とされた。

「学科目ノ程度」については、次のように記されている。

○ 国語

初メハ普通ノ漢字交リ文ヲ講読セシメ漸ク中古以降ノ平易ニシテ雅馴ナル文章及歌ニ及ホシ又日用書類記事文等ヲ作ラシメ兼ネテ文法ノ大要ヲ授ク

国語ヲ授クルニハ発音及句読ニ注意シ読方話方ニ習熟セシメ文章ヲ作ラシムルニハ簡明著実ニシテ達意ヲ旨トシ文題ハ務メテ実用ニ適スルモノヲ撰ヒ文法ハ講読作文教授ノ際其ノ他便宜ノ場合ニ於テ之ヲ授クヘシ

○ 漢文

經史記伝等ノ内平易ニシテ雅馴ナル文章ヲ講読セシム(傍線は引用者。)

この中で、「初メハ普通ノ漢字交リ文ヲ講読セシメ漸ク中古以降ノ平易ニシテ雅馴ナル文章及歌ニ及ホシ」とあり、古典教育の教材として、「中古以降」と規定している。

授業時数等については、「国語」（講読・作文）は、第一学年と第二学年は毎週五時間、第三学年から第六学年までは毎週四時間となっている。

イ 規則の制定

この後、次のような規則が公布された。

「高等女学校ノ学科及其程度ニ関スル規則」（明治三十二年二月二日 文部省令）

この規則は、「高等女学校令」（明治三十二年二月八日勅令）に基づいて公布されたものである。

「高等女学校令」では、修業年限は、四箇年を基本とし、一箇年を伸縮できることとした。入学資格は、中学校と同じく、年齢一二歳以上、高等小学校二年修了者としている。

「規則」では、第三条に国語の程度を示しているが、「高等女学校規程」（明治二八年）と全く同じである。

「漢文」も従前と同じく、随意科目としている。

また、この「規則」では、学科目ごとの時間数が示されていないが、愛媛県では次のように示している。

「愛媛県立松山高等女学校規則」（明治三十三年一〇月五日 県令⁽¹⁶⁾）

本科課程表

漢文	国語	学科目	学年
		時数	毎週
四	講読	作文	第一学年
		同上	同上
二	講読	作文	第二学年
		同上	同上
二	講読	作文	第三学年
		同上	同上
同上	同上	同上	第四学年
		同上	同上
同上	同上	同上	第五学年
		同上	同上

なお、漢文については、「漢文ヲ修メサル者ハ其時間ヲ自修ニ充ツ」と定めている。

ウ 教科書について

この当時の教科書においては、古典教材をどのように取り扱っていたのか、その例を挙げることにする。

『女子日本読本』（明治二八年 新保磐次編 金港堂⁽¹⁷⁾）の緒言では、次のように記されている。

「本書ハ高等女学校国語科及ビ女子高等小学校読方科ニ用ヒンガ為ニ作レル者ナリ。何レモ毎半期一冊ヲ課シ、通計八冊四箇年ノ後、高等女学校ハ中古文体ヲ主トセル書籍ヲ用フベク、高等小学校ハ、恰モ之ヲ以テ全科ヲ卒フベシ。故ニ古人ノ文ヲ取ルニモ其ノ程度ヲ考ヘテ、平家物語、太平記ヲ限リトシ、ソレヨリ以上ノ古文ハ取ラズ、多クハ徳川時代ノ文ヲ取レリ。」（傍線は引用者。）

具体的には、貝原益軒、伴蒿蹊、室鳩巢、柳沢里恭、湯浅元禎、新井白石、本居宣長、などの文章を多く採っている。

(三) 高等女学校令施行規則（明治三四年三月二二日 文部省令）

ア 規則の主旨

「学科及其ノ程度」で、「国語」は次のように定められた。

国語ハ普通ノ言語、文章ヲ了解シ正確且自由ニ思想ヲ表彰スルノ能ヲ得シメ文学上ノ趣味ヲ養ヒ兼テ智徳ノ啓発ニ資スルヲ以テ要旨トス

国語ハ現時ノ文章ヲ主トシテ講読セシメ進ミテハ近古ノ文章ニ及ホシ又実用簡易ナル文ヲ作ラシメ文法ノ大要及習字ヲ授クヘシ（傍線は引用者。）

ここでは、古典教育の教材の範囲が、従前の「漸ク中古以降ノ平易ニシテ雅馴ナル文章及歌ニ及ホシ」から「進ミテハ近古ノ文章ニ及ホシ」と改められた。

それまで学科目として独立していた「習字」は「国語」に編入され、また随意科目として認められていた「漢文」は省かれることとなった。

毎週授業時数も、四年制の場合は「六 六 五 五」、五年制の場合「六 六 六 五 五」となった。

イ 要目の制定

この規則の制定をうけて、次の要目が発せられた。

「高等女学校教授要目」(明治三六年三月九日 文部省訓令)

ここでは、「教授要目」の中で、「講読ノ材料」や「材料ノ配当」など、詳細な規定がなされたのである。概略は、次のようになっていた。

「第一学年及第二学年」

講読ノ材料ハ小学校ニ於ケル国語トノ連絡ヲ保チ今文ヲ用ヒテ修身、歴史、地理、理科、家事、実業、美術、社交等ニ関スル事項ヲ記シタル平正ナル記事文、叙事文、書翰文、唱歌及新体詩等ニシテ生徒知識ノ進度ニ適合スルモノタルヘシ又便宜歌及正確ナル口語ノ標準ヲ示スヘキ演説談話ノ筆記ヲ加フヘシ

材料ノ配当ハ凡記事文叙事文九、書翰文韻文一ノ比ニ依ルヘシ

「第三学年」

講読ノ材料ハ前二学年ニ準シ平正ナル近世文ヲ加フ之ヲ課スル比ハ凡今文六、近世文四トス

材料ノ配当ハ今文ニ於テハ凡記事文叙事文六、論説文三、書翰文韻文一トシ近世文ニ於テハ凡ソ記事文叙事文七、論説文韻文等三ノ比ニ依ルヘシ

「第四学年」

講読ノ材料ハ前学年ニ準シ平正ナル近古文ヲ加フ之ヲ課スル比ハ凡今文五、近世文三、近古文二トス

材料ノ配当ハ前学年ニ準シ近古文ニ於テハ近世文ノ例ニ依ルヘシ（傍線は引用者。）

なお、この要目から、「国語」は「講読（読方・解釈・暗誦）」、「文法及作文」、「習字」で構成され、そのいずれについても詳細な規定がなされた。

（四）高等女学校及実科高等女学校教授要目（明治四四年七月二九日 文部省訓令）

この要目は、「高等女学校令中改正」（昭和四三年一〇月二六日勅令）、「高等女学校令施行規則中改正」（明治四三年一〇月二七日文部省令）をうけて制定されたものである。「高等女学校令」により、実科高等女学校が設置されることとなった。毎週授業時数も修業年限が四箇年の場合「六 六 六」と決められた。

要目の中では、「国語」の四分科は前回と同じであるが、「講読」の内容を明示し、各学年毎にさらに詳しくその内容を示している。（なお、「講読」は、読方及解釈、話方、暗誦、書取をその内容としている。）

講読ノ材料ハ普通文ヲ主トシ口語文・書牘文・韻文ヲ交フ

普通文ハ現代文ヲ主トシ近世文・近古文ヲ交フ何レモ平易ニシテ作文ノ模範トスヘキモノタルヘシ

口語文ハ簡明ニシテ方言ヲ雜フルコトナク口語ノ標準ヲ示スニ足り話方・作文ノ模範トスヘキモノタルヘシ

書牘文ハ平易ニシテ繁縟ニ失セス日用書牘文ノ模倣トスヘキモノタルヘシ

韻文ハ新体詩・短歌・今様・俳句等ニ互リテ格調高雅ナルモノタルヘシ

「第一学年」及び「第二学年」

読本ハ尋常小学校トノ連絡ヲ図リ現代文ヲ主トシ口語文・書牘文ヲ交ヘ間々韻文ヲ加ヘテ組織セルモノタルヘシ

「第三学年」

読本ハ現代文ヲ主トシ近世文・口語文・書牘文ヲ交ヘ間々韻文ヲ加ヘテ組織セルモノタルヘシ

「第四学年」

読本ハ現代文ヲ主トシ近世文・近古文ヲ交ヘ間々書牘文・韻文ヲ加ヘテ組織セルモノタルヘシ（傍線は引用者。）

さらに、「諸種ノ文章ハ我国体及民族ノ美風ヲ記シ国民性ヲ發揮スルニ足ルモノ、健全ナル思想ヲ述ヘ温良貞淑ノ女徳ヲ涵養スルニ足ルモノ、古今東西ノ美德善行アル女子ノ事蹟又は忠良賢哲ノ言行ヲ叙シ修養ニ資スヘキモノ」と、高等女学校の国語科の方向付けを指示したのである。

ともあれ、中学校と同じように高等女学校の国語科の教育課程・教育内容は、明治期をもつて一応の整備がなされ、その定着が期待されたのである。

(五) 高等女学校令施行規則中改正（大正九年七月二日 文部省令）

この規則は、「高等女学校令中改正」（大正九年七月六日勅令）をうけて制定されたものである。「高等女学校令」の第一条は次のように定められた。

○高等女学校ハ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ為スヲ以テ目的トシ特ニ国民道德ノ養成ニ力メ婦徳ノ涵養ニ留意スヘキモノトス（傍線は引用者。）

・「中学校令」の改正と同じく、古典教育にも、「国民道德ノ養成」が強調されたのである。

「施行規則」では、「国語」の毎週授業時数は、修業年限が五年制にあつては、毎週授業時数は「六 六 六 五 五」に、四年制にあつては、「六 六 五 五」に、三年制にあつては、「五 五 五」と定められた。

これは、「高等女学校令中改正」により、修業年限を五箇年又は四箇年とし、三箇年の学校も認めためたための措置である、従前の四年を基本としたものを五年とすることになったのである。

(六) 高等女学校及実科高等女学校教授要目 (昭和十二年三月二七日 文部省訓令)

ア 要目の主旨

「国語」科の目的を次のように定めている。

○国語ニ於テハ国語ノ理會及応用ノ能ヲ得シメ特ニ我ガ国民性ノ特質ト国民文化ノ由來トヲ明ニスルコトニ注意シ国民精神ノ涵養ニ資スルコトヲ要ス

○材料ハ総テ醇正ナル国語ニ採リ国體ノ精華、國民ノ美風、偉人ノ言行特ニ女子ノ善行美德ヲ叙シテ國民精神ヲ涵養シ温良貞淑ナル婦徳ヲ達成スルニ足ルモノ、文學趣味ニ富ミテ心情ヲ優雅ナラシムルモノ、世界ノ情勢ヲ知ラシメテ円満ナル國民的常識ヲ養成スルニ足ルモノ、家庭生活ノ趣味ヲ向上セシムルニ足ルモノ等タルベシ (傍線は引用者。)

ここには、国家中心思想の指導が国語科の重要な任務の一つとなりつつあったのである。それとともに、「温良貞淑ナル婦徳ヲ達成スル」の文言で分かるように、高等女学校の在り方について、国語科においても強く要請されていたのである。そうした考え方は、どのような教材の中で取り扱われたのであろうか。

イ 教科書について

この時期の古典教材の取扱いの一例として、当時広く採用された教科書の採録状況をみることにする。

『新定女子国文』(昭和二年 吉田弥平編 金港堂 卷一—卷二)⁽¹⁸⁾
卷一(二六課で構成されている。)

中吉の誠実（柳沢淇園）、たきもの（安楽庵策伝）など

卷二（二八課）

卷三（二八課）

茶の湯（柳沢淇園）、南京の壺（柴田鳩翁）、甲冑堂（橘南谿）、三上山（浅井了意）など

卷四（二六課）

学芸に志す者（三浦梅園）、杉田壹岐（室鳩巢）、根分の後の母子（滝沢馬琴）、塩井川（十返舎一九）など

卷五（二六課）

桜の詞（賀茂真淵）、八歳宮の御歌（太平記）、空行く雁（曾我物語）など

卷六（二六課）

月下の笙（橘成季）、ものの上（富士谷御杖）、楠木正行の母（太平記）、妹にさとす（吉田松陰）など

卷七（二五課）

故郷の花（源平盛衰記）、夢の浮橋（新古今和歌集）、落花の雪（太平記）、隅田川（観世流謡曲）、奥の細

道（松尾芭蕉）、松下禅尼（兼好法師）、渡辺競（平家物語）、針立雷（続狂言記）など

卷八（二二課）

皇太神宮（本居宣長）、いさよふ月（阿仏尼）、四時のあはれ（兼好法師）、同じ人間（渡辺崋山）、重盛諫

言（平家物語）、雀（宇治拾遺物語）など

卷九（二二課）

馬追三吉（近松門左衛門）、世界の借家大将（井原西鶴）、幻住庵記（松尾芭蕉）、百虫譜（横井也有）、おのが物まなびのありしやう（本居宣長）、芳宜園大人の霊を祭る（村田春海）、月の前（上田秋成）など

卷一〇(一二課)

飛鳥川(兼好法師)、羽衣(謡曲)、月草の花(増鏡)、熊野落(太平記)、重盛諫言、大原御幸(平家物語)、春は曙(枕草子)、寧樂のほひ(万葉集)など

採録されている古典教材は、近世文を中心にして広範囲に及んでおり、数多くの教材で構成されている。

(七) 高等女学校教科教授及修練指導要目 (昭和一八年三月二五日 文部省訓令)

この要目には、「国民科国語」のあるべき姿を次のように示している。

「教授要旨」

国民科国語ハ正確ナル国語ノ理会ト発表トノ能力ヲ養フト共ニ古典トシテノ国文及漢文ヲ習得セシメ国民的思考感動ヲ通ジテ国民精神ヲ涵養シ我が国文化ノ創造発展ニ培フモノトス

「教授事項」

講読ハ皇国ノ道ノ具現タル各時代ノ国文ト皇国ノ道ノ発展ニ寄与セル漢文トノ中ヨリ醇正ナルモノ及婦徳ノ涵養ニ適切ナルモノヲ選ビ之ガ正確ナル読誦ト解釈トヲ課スベシ(傍線は引用者。)戦時下教育の思想が、色濃く打ち出されたものとなっている。

この要目及び「高等女学校規程」(昭和一八年三月二日文部省令)によつて、高等女学校の特色は次のようにまとめることができる。

○「中等学校令」(昭和一八年一月二二日勅令)によつて、高等女学校は、中学校、実業学校とともに、一括して「中等学校」と呼ばれることになる。

○「国語」は、「修身」、「歴史及地理」とともに国民科の一科目となる。

○講読に「漢文」が導入され、「国文」とともに学習することとなる。

○「国民科国語」は、講読・文法・作文及び話方の四領域となる。

○毎週授業時数は、四年制では「五 五 四 四」となる。

○「習字」は、「芸能科書道」となる。

○教科書は、国定教科書を使用することとなる。

この段階になって、中学校と同じように、「漢文」が必修となったのである。これも、戦時下の教育体制の中では、当然の措置であつたわけである。

三 実業学校における実践

(一) 徒弟学校規程（明治二十七年七月二五日 文部省令）

明治五年（一八七二）年の「学制」や明治一二年の「教育令」以後も、中等教育機関としての実業学校の制度は明確にされなかった。ましてや、国語科教育についても、その実践の様子はよく分かっていない。

しかし、この規程によつて、国語科関係の教科目をかいま見ることができる。

第六条 尋常小学校ヲ卒業セスシテ入学ノ許可ヲ得タル者ニハ本科ノ外読書、習字ヲ課スヘシ又作文ヲ加フルコトヲ得

尋常小学校卒業ノ者ト雖其ノ志望ニ依リ読書、習字、作文ノ一科目又ハ教科目ヲ授クルコトヲ得もちろん、徒弟学校の教科目としては、修身、算術、幾何、物理、化学、図画及職業に直接関係あるもの等が設けられていたが、その中には、国語科関係の科目は入っていない。

(二) 実業学校令 (明治三十二年二月七日 勅令)

ア 実業学校令の主旨

この実業学校令によつて、実業学校の種類は、工業学校、農業学校、商業学校、商船学校及び実業補習学校とされた。この令の公布により、各学校についてそれぞれ規程を設けたが、国語科の科目は次のようなものが設けられたのである。

○工業学校規程 (明治三十二年二月二五日 文部省令)

読書、作文 (修業年限三箇年)

○農業学校規程 (明治三十二年二月二五日 文部省令)

甲種 (年齢十四年以上学力修業年限四箇年の高等小学校卒業生) (修業年限三箇年)

読書、作文

乙種 (年齢十二年以上学力修業年限四箇年の尋常小学校卒業生) (修業年限三箇年)

読書、習字、作文

○商業学校規程 (明治三十二年二月一五日 文部省令)

甲種 (年齢十四年以上学力修業年限四箇年の高等小学校卒業生) (修業年限三箇年)

読書、習字、作文 (乙種も同じ)

○水産学校規程 (明治三十四年十二月二八日 文部省令)

本科 (修業年限三箇年)

国語

この当時の実業学校における国語科の授業内容とりわけ古典教育の実践については、よく分かっていない。

愛媛県下の学校の実態を把握することによって、その指導内容を推し測ってみたい。

イ 実業学校の例

「愛媛県立商業学校規則」(明治三四年一〇月二三日 愛媛県令)⁽¹⁹⁾

「教科ヲ別チテ予科及本科トシテ予科ハ本科ニ入ルニ必須ノ学科ヲ教授シ本科ハ主トシテ商業専門ニ関スル学科ヲ教授ス」と規定し、「学科目課程及毎週教授時数」を次のように定めている。

学 年	学 科	学 科 目	
		時 数	教 授 時 数
予 科	第一学年	四	現時及近古ノ国文 平易ナル漢文
		二	普通信書 記事文 談話筆記
	第二学年	同上	同上
		同上	同上
本 科	第一学年	三	現時及近古ノ国文 時文及平易ナル漢文
		二	商業信書 記事文
	第二学年	同上	同上
		同上	同上
	第三学年	同上	同上
		同上	同上

商業学校においては、古典教育として「近古ノ国文」「平易ナル漢文」が実施されていたことが分かる。「読書」「作文」の時間数も比較的多く、作文には、商業関係の文書事務を含んでいる。

明治四一年の学則では、学科目として「読書・作文・習字」が設けられ、「普通文ノ講読・作文・習字」をその内容としている。

「愛媛県農業学校規則」(明治三三年三月二四日 愛媛県令)⁽²⁰⁾

ここでは、「学科目課程及毎週教授時数」を次のように定めている。

学科	学年	毎週 授業 時間
読書 作文 三	第一学年	読書 漢字 交り文 作文 記事 文 日用文
	同上	
	第二学年	同上漢文
	同上	
同上	第三学年	同上

毎週授業時間数は極めて少ないが、第二学年から「漢文」が加わっている。明治三五年の改正では、授業時間は三・二・二となり、読書は全学年「現今及近古ノ国文、平易ナル漢文」となった。

「松山市立工業徒弟学校学則」（明治四二年七月二三日設立⁽²¹⁾）

「教科課程表」は次のようになっていた。

国 語	第一学年			第二学年			第三学年		
	普通文ノ読方綴方	課程	毎週 時数	同上	課程	毎週 時数	同上	課程	毎週 時数
	三			同上			同上		

修業年限三箇年で、国語は毎週三時間である。

これ以後の実業学校の学科目としては、次のような名称で設置されている。「国語」、「読書及作文」、「読書作文習字」、「国語及漢文」、「国語漢文」などである。

一部の学校では、「現今及近古ノ国文、平易ナル漢文」と明記しているが、多くの学校では、「講読・作文」という文言でその内容を示している。

いずれにせよ、古典教育の実践という点では、実施していないか、実施されても初步的な平易なものであったことが推測されるのである。

ウ 実業補習学校の例

実業補習学校については、明治三五年に法改正があり、設立者が地域に応じて適当に設置ができることとなつたため、多くの学校が創設された。

「西外海村立福浦水産補習学校規則」(明治三五年開校)⁽²²⁾

ここでは、「読書」と「作文」を設け、次のように教授要旨を定めている。

教授要旨

読書

普通ノ文章ヲ素読シ且ツ之ヲ理解スルノ力ヲ養フト俱ニ実業思想ヲ發達セシムヘキ事項及水産業ニ須要ナル理化学上ノ事項ヲ記述シタル漢字文ヲ授ケ且ツ言語練習セシメンコトヲ務ムルヲ要ス

作文

水産業ニ須要ナル事項ヲ行文平易ニ旨趣明瞭ニ記述セシムルコトニ注意スルヲ要ス

「教科課程毎週教授時間表」は次のようになっている。

科目	事項	毎週	
		時間	教授
国語	七	第一学年	読書 近易ナル漢字交リ文 作文 近易ナル漢字交リ文 習字 日用文字 日用書類
	七	第二学年	同上ノ続
	七	第三学年	同上ノ続

「喜須来村立喜須来農業補習学校規則」(明治三五年開校)⁽²³⁾

ここでは、「教科及授業時数」を次のように定めている。

国語

農業上必須ノ事項ヲ記載シタル漢字交リ文ヲ授ケ読ミ方話シ方ヲ知ラシメ必要文字ニツキ楷行草ノ書キ方ヲ授ケ兼テ処世ニ必要ナル漢字交リ文日用書類ヲ記述セシム

学科目	時数	第一学年	時数	第二学年
国語	六	漢字交リ文ノ読ミ方 書キ方話シ方綴リ方	六	普通文ノ読ミ方話シ 方書キ方綴リ方

以上の例で分かるように、当然のことではあるが、古典教育に関するものは見られず、実業補習に徹している。この後、県では実業補習学校の増加に伴い、次の訓令を出して指導に当たっている。

「実業補習学校学則準則」(大正七年八月九日 県訓令⁽²⁴⁾)

「教科課程及毎週教授時数表」で、国語は次のように定めている。

農業補習学校教科課程及毎週教授時数表

教科目	学年	毎週教授時数	第一学年	毎週教授時数	第二学年	毎週教授時数	第三学年	毎週教授時数	第四学年
国語	綴方	男七 女四	日常須知ノ文字及普 通文ノ読ミ方書キ方 綴リ方	三六	日常須知ノ文字及普 通文ノ読ミ方書キ方 綴リ方	三五	日常須知ノ文字及普 通文ノ読ミ方書キ方 綴リ方	三五	日常須知ノ文字及普 通文ノ読ミ方書キ方 綴リ方

この準則によって、実業補習学校における国語科の位置付け、方向付けがなされたわけである。

(三) 実業学校教授要目 (昭和十二年三月二十七日 文部省訓令)

「国語」の科目が設定され、教授要目には、「授業時数」については次のように定めている。

第一学年から第三学年までは、「毎週四時乃至六時」、第四学年「毎週二時乃至四時」、第五学年「毎週二時乃至三時」となっている。

また、国語の授業内容については、次のように示している。

国語ハ講読・作文・文法及習字ヲ課スルモノトス講読ハ読方及解釈・話方・暗誦・書取ヲ課シ其ノ材料ハ総テ醇正ナル国語ニ採リ国体ノ精華、国民ノ美風、偉人ノ言行等ヲ叙シテ国民精神ヲ涵養スルニ足ルモノ、実業ノ国家的・社会的意義ヲ認識セシメテ勤勞精神ヲ振作スルニ足ルモノ。世界ノ情勢ヲ知ラシメテ円満ナル国民的常識ヲ養成スルニ足ルモノ、文学趣味ニ富ミテ心情ヲ高雅ナラシムルモノ等タルベシ但シ女子ニ在リテハ特ニ婦徳ノ涵養ニ適切ナル材料ヲ加フベシ尚講読ニ於テハ漢文ヲ加フルコトヲ得其ノ材料ハ邦人ノ著作及漢籍中ヨリ平易雅馴ニシテ主トシテ我が国ノ徳教ニ關係アルモノヲ選ブベシ（傍線は引用者。）

実業学校の指導内容としては、初めて詳細なものが制定され、その方向付けがなされたのである。この要目は、修業年限五箇年のものを標準として作成されているが、古典教育の中に「漢文」が導入されてよいとの判断を明記している。

要目制定の趣旨等は、中学校や高等女学校のところで述べたのと同じである。

(四) 実業学校規程（昭和一八年三月二日 文部省令）

昭和一八年一月二二日に公布された「中学校令」によって、従来の「実業学校令」は廃止され、実業学校は、中学校・高等女学校とともに「中等学校」として包括されることになった。

総則の第一条の二には次のような記述があり、戦時下の教育の実情をうかがい知ることができる。

○皇国ノ東亞及世界ニ於ケル使命ヲ明ニシ皇国産業ノ重要性ヲ自覺セシメ職分ヲ尽シテ皇運ヲ扶翼シ奉ルノ

信念ト実践力トヲ涵養スベシ

「国語」は、中学校と同じように、国民科の一科目となり、「国民科国語」となった。

戦時の態勢のもと、勤労奉仕に工場へ動員されるなど十分な教育条件は整わなかった。そのなかでの古典教育の定着は、困難をきわめたのである。

おわりに

我が国の古典教育の実態と展開について、明治五年の「中学教則略」から昭和一八年の「教科教授及修練指導要目」までを概観したものである。

古典教育は、それぞれの時代において種々の制約を受けながらも、国語科教育の中で力強く息づいてきたことが分かる。それは換言すれば、国語科教育そのものの展開と定着の歴史でもあった。

戦後、昭和二六年の『中学校高等学校学習指導要領国語科編』（文部省発行）以後、教育課程の改訂は数多くなされたが、明治・大正・昭和にわたる古典教育の実践史はどのように生かされてきたのであろうか。

今日、高等学校において、種々の指導法が研究され、意欲的な実践がなされつつあるが、昭和二〇年以後の新制高等学校における実践史の研究・解明が新たな課題となってくるのである。

参考文献

勅令・省令・訓令等は、次の書物を参考にした。

『国語教育史資料第五卷』東京法令 平九

『近代日本教育制度史料第一巻（第三卷）』講談社 昭五一

文中に引用した部分は、次の書物によっている。

- (1) 『愛媛県史資料編近代Ⅰ』愛媛県 昭五九 三六〇頁
- (2) 『愛媛県教育史第四卷』愛媛県教育委員会 昭四六 一九頁
- (3) 『子規全集第九卷』講談社 昭五二 三九頁
- (4) 『愛媛県教育史資料篇第一集』愛媛県教育センター 昭四四 一七四頁
- (5) 『愛媛県教育史第四卷』愛媛県教育委員会 昭四六 九四頁
- (6) 『教育制度発達史第三卷』教育史編纂会 昭一三 二〇一頁
- (7) 『愛媛県教育史第四卷』愛媛県教育委員会 昭四六 一五四頁
- (8) 『国語教育史資料第二卷』東京法令 平九 二三一頁
- (9) 『愛媛県教育史第一卷』愛媛県教育委員会 昭四六 六七七頁
- (10) 『国語教育史資料第一卷』東京法令 平九 五七頁
- (11) 『愛媛県史教育』愛媛県 昭六一 八一頁
- (12) 『国語教育史資料第二卷』東京法令 平九 五三一頁
- (13) 『同右書』五四八頁
- (14) 『愛媛県立松山南高等学校九〇年のあゆみ』昭五六 一一九頁
- (15) 『愛媛県教育史第四卷』愛媛県教育委員会 昭四六 一一一頁
- (16) 『同右書』二二二頁
- (17) 『国語教育史資料第二卷』東京法令 平九 二七〇頁
- (18) 『同右書』五五六頁
- (19) 『愛媛県教育史第四卷』愛媛県教育委員会 昭四六 二四二頁
- (20) 『同右書』二〇五頁
- (21) 『同右書』三七五頁
- (22) 『同右書』二六七頁
- (23) 『同右書』二七一頁
- (24) 『同右書』四四四頁